

金澤文庫所蔵『法華玄贊文集』巻八十について

蜷 川 祥 美

要旨

金澤文庫所蔵『法華玄贊文集八十』の前半部は、慈恩大師基の『法華玄贊』に関する諸文を集めた書であり、『妙法蓮華経』の「三車火宅の喩」について、特に菩薩が門外に牛車を索めるか否か解釈するにあたり、法相宗の立場を追求するものであった。蔵俊は自説の中で、慧沼が示した三乗がともに車を索めるという説について、護命が慈恩大師基の説であるとしたことを否定し、法雲など四車家の説だとしている。これは、孫弟子の貞慶にも受け継がれており、この書が後世にも影響を与えていることが知られるのである。

また、二乗は車を索め、菩薩は索めないという説が実義であるとの記述は、既に初地に入った菩薩ならば必要がないことであるとの主張が背景にあることが分かる。四車家の説は、『妙法蓮華経』を十分に理解していないのだという。尚、『法華玄贊文集八十』の後半部は、徳一の『中辺義鏡残』が引用されたものであった。

キーワード 蔵俊・一乗義・三車火宅・索車・『中辺義鏡残』

序

平安末期の法相宗の学匠、蔵俊（一一〇四〜一一八〇）の『法華玄贊文集』は、慈恩大師基（六三二〜六八二）の『法華経玄贊』に関連する

経論疏を集め、法相教学の立場から『法華経』を解釈した著述である。

現在、金澤文庫には、称名寺蔵『法華玄贊文集』が四帖保管されている。^①その表題はそれぞれ以下の通りである。

- ①法相 法華玄贊文集八十 一乗義 三車五 索車諍文
- ②法華玄贊文集八十六 一乗義 無余二
- ③法華玄贊文集八十九 一乗義 無余五
- ④法華玄贊文集九十 一乗義 無余六

この中、③には、

応保二年閏二月二十日始_レ之。至_二同二十二日晨朝_一。

抄_二此卷_一了。 大法師蔵俊^②

と、応保二年（一一六二）閏二月二十日から二十三日にかけて著された旨の蔵俊の奥書があり、④には、

応保二年閏二月二十三日成_レ封抄_二

此卷_二了。 大法師蔵俊記_レ之。^③

と、同じく応保二年閏二月二十三日に著された旨の蔵俊の奥書があることから、蔵俊の著作であることは疑いようがない。また、②については、③④と同じく二乗のものが無余涅槃に至れば、決して成仏できないことを、様々な経論を引用した上で、「今案」以下で自説を述べるといった記述のありさまが共通しており、蔵俊の著作であることは間違いない。^④

しかし、本論でとりあげる①「法華玄贊文集八十」には、蔵俊の奥書は見当たらない。本帖が、蔵俊の著作なのか否か、その内容について検討してみることにする。

一、『法華玄贊文集八十』の構成について

本論で考察を試みる『法華玄贊文』八十は、表紙に、

法相	全海
法華玄贊文集八十	伝領湛春
一乗義 三車五	
索車諍文	

とあり、二十五丁右の奥書に、

一重云々
□故□□三曆中秋第八天於金澤東庵写之
求法貧道全海

とあることから、一乗義の中、『妙法蓮華経』の三車火宅の譬喩について述べた段の五冊目にあたり、索車の論争に関する文を集めたものであることが分かる。

書写者は、称名寺の全海であり、表紙によれば、湛春が所持したものである。

残念ながら、全海の書写年代は、判読できなかった。

本文は、以下のような構成となっている。

「一乗義 三車五」

①慧沼・『法華玄贊義決』（大正三四・八六八中～下）引文・一丁右一行～一丁左九行

②護命・『法華義決解節記』四（不明）引文・一丁左十行～三丁左八行

③基・『法華玄贊』五（大正三四・七四九下～七五〇下）引文・三丁左九行～五丁左十行

④歳俊自説・五丁十一行～六丁左十一行

「索車諍文」

⑤徳一・『中辺義鏡残』第六「破索牛車義文」（不明）・六丁左十二行～十二丁左四行

⑥「破法蔵師索車義文」（不明）・十二丁四行～十四丁右十行

⑦徳一・『中辺義鏡残』七「索車義残決」（不明）・十四丁右十一行～二十四丁右一行

尚、二十三丁十二行は、明らかに文章の途中で記載が途切れている。

二十四丁右には、一行のみ記されているが、初の四字は脱字となっており、最後に「相違」とのみ記されている。

二、「一乗義 三車五」について

『法華玄贊文集八十』の前半部は、一乗義のうち、『妙法蓮華経』譬喩品第三の「三車火宅の喩」^⑧について諸文を集めたものである。ただし、本書の表紙に、「三車五」とあるように、『法華玄贊文集』で「三車火宅の喩」について述べた巻は、『法華玄贊文集七十六 三車一』か

ら『法華玄贊文集八十 三車五』までの計五巻が存在していたものである。『法華玄贊文集八十 三車五』では、三車火宅の喩についての諸文のうち末尾しか知ることができないということになる。

そもそも、「三車火宅の喩」とは、長者が、火宅で遊ぶ三子に対し、門外に羊車・鹿車・牛車があり、それを与えると言って誘い出し、門外で大白牛車を与えたというものである。『妙法蓮華経』には、

父知諸子先心各有所好。種種珍玩奇異之物。情必樂著。而告之。言。汝等所可玩好希有難得。汝若不取後必憂悔。如以此種種羊車鹿車牛車今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅宜速出來。

とあり、三子の父である長者が、三子の好みを知っており、その好みに合わせた羊車・鹿車・牛車の三車が門外にあり、それで遊ぶことができると誘って、火宅から門外へ避難させたというのである。

『法華玄贊文集』「三車五」では、一丁右一行一丁左九行にかけて、「義決云」と、法相宗第二祖、慧沼(六四九〜七一四)の『法華玄贊義決』が引用されている。⁷⁾

以下、それを示す。

『法華玄贊文集八十』

【一丁右】

義決云。『問。門外索車為三乘ノ人。並悉索車ヲ為唯二乘一。

答。有二解。一云。通三乘。索。又文無簡故。旧徳ノ説ルカ故。説二

諸子ノ故。二云。唯二乘索非菩薩。何以故。宅喩分三段。得出分段。

名為出宅。二乗ハ出宅得無學果。菩薩出宅在初地。二乗無

學末

得三種智。當能修學名為索車。初地已上得三種智ノ車。故不

須

索。若以修學即名索車。十智皆修故。恒常索。若爾即應菩薩。元不レ上レ車。何得説言乘レ車遊戲。又論云「前令入不退地。示

與無量智業」。初地已上。即得智業。雖知修學。經不云索

説遊戲。故。二乗出宅未得三種智。未至初地。可修學。義以

名索

車。又論云。「第一ノ人ハ與世間種々善根三昧ノ功德。令其遊戲。

後令入大涅槃ノ城」。以レ與世善。未得其真。可須言

索。菩薩ハ不レ指羊

鹿。初地已上得真。所以菩薩不索。或有説云。初機ハ虚指。故

車須索。或

【一丁左】

云宅内ニ聞テ三。門外ニ見レ一。不知誰一。是故須索等。皆非二

実説。

問。既菩薩不索車。得名出宅坐。不答。称コトハ出宅坐。

但約二

乘。學究竟ノ故。離障盡ノ故。心止息ノ故。建立三果ノ故。菩薩之人

學未究竟ノ故。未離障盡ノ故。不建立三果ノ故。心不止息ノ故。

不レ得説云露地而坐。若雖分別一名露地坐。前三果ノ人モ

亦

應レ如是。若謂有學。亦名出宅坐。云何下ノ合喩中云。「以仏教門

出三界苦怖畏險道。得涅槃ノ樂」。又釈菩薩。亦得名(稱)レ坐。

雖不止息。及以制果ノ故。然以智安処。亦得名レ坐。

能伏惑ノ故。出分段ノ故。名出三界。露地無妨。若爾三果亦應レ如

是

許無失。取捨任意。云々。

慧沼は、初に、門外の三車を索めるのは、声聞・独覚・菩薩の三乗の人か、声聞・独覚の二乗の人なのかと問い、答えとして二解があるとす。初解は、『妙法蓮華經』には、菩薩が車を索めないとする記述はないのだから、三乗の人が共通して車を索めるのだというものであり、これは「旧徳」の説であるという。二解は、車を索めるのは、二乗の人であり、菩薩は索めないのだという。これについて、「論云」として世親（四〇〇〜四八〇頃）の『妙法蓮華經爰波提舍』や基（六三二〜六八二）の『法華玄贊』を引用しながら、初地以上の菩薩は、既に十智を修めているので、牛車を索める必要がないのだとするのである。

また、次に、菩薩は車を索めないが、三子とともに火宅を出て露地に坐していることは認められないのではないかと問い、二乗にとって露地に坐すことは、離障を尽くし、心を止息した有学の果を指すが、菩薩にとっては未だ離障も尽くさず心も止息していないので、露地に坐すとは説けないという。しかしながら、『妙法蓮華經』の「仏教の教えによつて、三界苦を畏れて險しい道を出て、涅槃の楽を得る」という理によれば、菩薩も、分段生を出て、三界を出ることになるので、露地に坐すとも説けるのだという。しかし、露地についての解釈が、二乗と菩薩で異なることについては、各自の意に任せて取捨選択すべきこととしている。

さて、次の引文は、護命（七五〇〜八三四）の『法華玄贊義決解節記』の文である。これは散逸して現存していない書である。

以下に示す。

『法華玄贊文集八十』

【二丁左】（十一行）

解節記四之文。『問。門外索_レ車為_三乘人_一。並悉索_レ車為_二唯_二乘等_一者。言_レ無簡故_一者。經文不_レ簡故。謂_レ經文不_レ簡_二唯_二

二乘_一。背_レ菩薩_一不_レ求故_一。言_レ旧徳説_レ故者。即指_レ本也。大

【二丁右】

乘基師_一名為_二旧徳_一。謂_レ彼法師_一説_三乘人須索_レ求_レ故_一。言_レ説_二諸子_一故者。經云_レ時諸子等各白_レ父言_レ。父先所_レ許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜與_一。云々。既言_レ諸子_一故_三子索_レ也_一。云。慈恩法師_一三乘須_レ索_レ唯_レ在_二此説_一。都無_レ余也。又_二云_一。唯_二乘索_レ非_二菩薩_一等者。此説意者菩薩之子不_レ索_レ牛車_一。以_レ已得故。義決師言_{ナリ}。非_二本師義_一。雖_レ同_二藏師_一而義意別。藏疏第六云_レ問。為_二三人_一索_レ三。為_二一人_一索_レ三。答。據_二出門_一而索_レ三者。但是羅漢_一辟支_ト二人

索_レ三耳。小乘所_レ明_下菩薩之人從_二初発心_一乃至_二補処_一未_レ断_二煩惱_一猶是凡夫_一。故在_二門内_一不_レ得_レ言_レ出_レ門外_一索_レ車。大乘菩薩出_二三界外_一自知_三未_レ至_二仏果極位_一亦不_レ索_レ車。又_三三車譬_二三乘之果_一。羅漢辟支至_二果処_一不_レ見_レ果不_レ得_レ故索_レ車也。菩薩_一無_レ有_レ至_二仏果_一不_レ得_レ上_レ故不_レ索_レ車_一。文。菩薩_一不_レ索_レ。既_二二師同而不_レ索_一。由_二二師不_レ同可_レ見_一。

【二丁左】

知_レ之。文_一若_レ以_二修学_一至_二故恒常索_一者難_レ初説_一也。言_レ若爾即_レ應_一等者追亦難也。若許_二常索即_レ心菩薩_一不_レ得_レ上_レ車_一。何_レ経_一為_レ言_レ「乘_レ車遊戯_一」者長者_レ独言_一。「以_レ是妙車等賜_レ諸子_一。諸子_一是時歡喜踊躍乘_二是寶車_一遊_二於四方_一嬉戯快樂自在_一無碍_一。文。言_レ又論云。為_レ令人_一等者。論解_一開示悟入_二四中_一明_二第四入_一云。「四者為_レ令_レ証_レ不退転地_一示現欲_レ與_二無量智業_一故_一」以上。「入_レ」者「証_レ」也。初地以上名_二不退地_一也。所知無量故云_二無量智_一

也。彼無

量智即造作故名_レ之為_レ菩薩也。「示現欲」事字「與」等字別論

言者既與_レ無量智業_レ此即牛車体故。何処求_レ之也。言_レ「

經不_レ云_レ索者既言_レ諸子_レ。又云_レ「羊鹿牛車願時賜與」文。

何云_レ不_レ云_レ索耶。意顯者彼文意惣不_レ列_レ菩薩索_レ牛車_レ

故_レ第一_レ人_レ者求_レ人_レ天勢力_レ人也。彼昔求_レ勢故_レ仏與_レ。定

【三丁右】

令_レ甚遊戯_レ唯得_レ世善_レ未_レ得_レ真智_レ故。不_レ言_レ索也。菩薩初地已得_レ

真智_レ。何又求_レ之也。言_レ「菩薩不_レ指羊鹿」上_レ者唯示_レ牛車_レ。不_レ示_レ

羊鹿_レ故。文_レ或有說初機虛指故車須_レ索_レ者光宅寺雲

法師也。謂彼師_レ「臨門三車以為_レ三乘_レ。四衢所授大白牛車方

為_レ第四_レ。以後臨_レ門中牛車亦同_レ羊鹿_レ但不_レ得_レ故_レ之義當_レ此

師_レ。臨_レ門三乘便初機故、出_レ宅已得_レ俱索_レ車也。文_レ或云。宅内

聞_レ三。門外見_レ一不_レ知_レ誰_レ一。是故須索_レ等者_レ等文。又問。「既菩薩

不_レ

索_レ車得_レ名_レ出宅坐_レ不_レ者不_レ索_レ車義。爾遊戯問。下答之中

有_レ三_レ積別_レ。初積決師答也。言_レ又積_レ「菩薩」以下以為_レ彼答_レ也。此

後

積者慈恩本意也。經文云。「是時長者見_レ諸子等_レ安穩得_レ出。

皆於_レ四衢道中露地_レ而坐故。無_レ復障礙_レ。其心泰然歡喜踊躍_レ以上。

「離_レ障度_レ難名_レ安穩出_レ也。四諦之理為_レ四衢道_レ。三乘並觀

【三丁左】

四諦理故。離_レ煩惱障_レ出_レ分段生_レ無_レ擁日_レ露。各有_レ三所依果滿之位_レ

名_レ地。以_レ智安處_レ証_レ之名_レ坐。二乘之人得_レ阿羅漢_レ斷_レ諸煩惱_レ住_レ有

依涅槃_レ。大乘之人已入_レ初地_レ得_レ無住涅槃_レ。伏_レ諸煩惱_レ離_レ分段生死_レ。

名_レ露地坐_レ無_レ復障礙_レ。意_レ以_レ仏教門_レ出_レ三界苦怖畏_レ。

即慈恩疏第五也

險道_レ。等者。以_レ經為_レ門。而緣_レ三界_レ。以_レ行為_レ門。而入_レ涅槃_レ。今此不_レ

說_レ入_レ於涅槃_レ。明_レ厭險_レ故。言_レ「取捨任意_レ」者。此判_レ処安_レ。彼

說

更是本疏所說後可_レ能詮_レ耶。言_レ爾。坐_レ者因_レ行之中臨_レ門

如_レ馳得_レ果究竟_レ如_レ坐_レ云々。

護命は、慧沼の『法華玄贊義決』の門外の三車を索めるのは、声聞・

獨覺・菩薩の三乘の人であるという初の解釈について、「旧徳説」とは

慈恩大師基の説であるとするが、その論拠は、『法華玄贊』の「既に諸

子と云うが故に、三子の索むるなり」という文のみであると、二解の

車を索めるのは、二乗の人であり、菩薩は索めないという解釈について

は、「義決師」すなわち慧沼の言であり、「本師」すなわち、慈恩大師

基の義ではないとする。そして、この二解は、「蔵師」すなわち吉蔵

(五四九く六二三)も同じだといながらも、その意は別であると、

『法華義疏』を引用する。それによれば、吉蔵は、羅漢と辟支の有学果

を得た二人が三車を索めているのであり、彼ら小乗の者が見る菩薩は、

初発心から補処に至るまでの、未だ煩惱を断じていない凡夫なので、門

外に車を索めない。もしくは、大乘の菩薩は、三界の外に出て、未だ

仏果に至らないので、門外に車を索めないのだとするのである。

また、『法華玄贊義決』には、三乘人が修学して常に三車を索めるこ

とを菩薩にも説くならば、菩薩が「上車」すなわち大白牛車を得ること

がないということになってしまふという。これは、門外の三車を索める

のは、声聞・獨覺・菩薩の三乗の人であるという初の解釈を難じている

とし、『妙法蓮華経憂波提舍』の不退転地は、無量智乗であるとの文を

引用して、無量智乗とは牛車の体であるので、初地の菩薩は牛車を索め

ることはないのだという。そして、この説は、羊・鹿・牛・大白牛車の四車説を採る法雲（四六七〜五二九）と同意だとする。

しかしながら、護命説の引文の最後に、『法華玄賛義決』の「菩薩は車を索めないが、三子がともに火宅を出て露地に坐していることは認められないのではないのか」との問いの初積の「二乗にとって露地に坐すことは、離障を尽くし、心を止息して有学の果を指すが、菩薩にとって未だ離障も尽くさず心も止息していないので、露地に坐すとは説けない」という説について、「決師答」すなわち慧沼の説だとし、後積の「菩薩も、分段生を出て、三界を出ることになるので、露地に坐すとも説けるのだ」という説について、「慈恩の本意」すなわち基の説だという。

そして、『法華玄賛』に、『妙法蓮華経』の「火宅を出た諸子を見た長者が、三子とも安穩に、四諦の理を観じる露地に坐したので、障碍がなく、その心は泰然として歓喜踊躍した」の文を解釈して、「火宅を出て露地に坐した三乗とともに四諦の理を観ずるので、煩惱障を離れ、分段生を出ることになる。二乗の人は阿羅漢を得て、諸煩惱を断じて有依涅槃に住し、大乘の人は、既に初地に入っていれば、無住涅槃を得て、諸煩惱を伏し分段生死を離れているので、三乗の人が露地に坐すことに矛盾はないのだ」という文や、『妙法蓮華経』の「仏教の門によって三界苦を畏れて険しい道を出ることができる」という文を引用して、露地に座すことを。三乗それぞれの行為、すなわち因行中の修行によって、それぞれの涅槃を得ることであるとの解釈を提示しているのである。

また、慧沼が「露地についての解釈が、二乗と菩薩で異なることについては、各自の意に任せて取捨選択すべきこと」であるとするのは、『法華玄賛』の解釈を承けてのものであるとも述べている。

『法華玄賛義決解節記』の引文に続き、蔵俊は基の『法華玄賛』五を

引用する。^⑥
以下に示す。

『法華玄賛文集八十』

【三丁左】（九行）

玄賛五云。『経』是時長者至^二歡喜踊躍^一。賛曰。父遂心安也。離^レ災度^レ難名^二安穩出^一。四衢道者四諦理也。三乗並觀^二四諦理^一。故。大般若中説^二「四衢道^一為^二四諦^一」故。離^レ煩惱障^一出^二分段生^一。

【四丁右】

無^レ擁名^レ露。各有^二所依果滿之位^一名^レ地。以^レ智安処証^レ之名^レ坐。分段生死當^二五蘊苦・惑・業^一皆尽或断或伏。離^二三障^一故名^一無障礙^一。適^二父本意^一故泰然。見^二子超^レ危故歡喜。二乗之人得^二阿羅漢^一断^二諸煩惱^一住^二有余依涅槃^一。大乘之人已入^二初地^一得^二無住涅槃^一。

伏^二諸煩惱^一離^二分段死^一。名^二露地坐^一無^レ復障^一。経。「時諸子等至^二願^一時賜與^一。」賛曰。上^レ喻^二昔權^一。下^レ喻^二今実^一。有^二初^一。初^レ喻授^レ実。

後^レ喻^二積^レ疑。下問答是。初中有^レ四。初諸子索^レ三。二父但與^レ一。三積^二成父志^一。四越^二本^一（大イ）子心^一。此初也。玩者戲弄。好音^レ呼

到^レ反^二愛^一也。或呼老^レ反^二善也、宜也、美也。隨^二三乘機^一皆於^二仏処^一。專^レ意

希^二求^一自乘妙智^一。義同^二父各索^一其車^一。二乗之人離^二分段死^一

已得^二解脱^一。証^二於四諦^一入^二於化城^一已名^二出宅^一。專^レ於^二仏所^一聞^二思修^一

【四丁左】

種智上。了達求^二証諸法^一名^二索^一羊・鹿^一。菩薩之人依^二此本論^一初地已

上雖離分段。未証解脫不名入城。不疲倦故不入有余。不說菩薩入化城故。入無住涅槃。亦息分段死。縱名入城未乘。

通理。若爾亦心許上羊・鹿。故知但如初解為善。已伏煩惱出分段死。亦証四諦。亦名出宅坐四衢道。求仏妙智亦名於

父索其牛車。問。三子並出分段。二乘独称入城。

大子亦言出苦心亦得称入城。答。無倦不厭苦大子

不入城。伏惑離分段亦得称出宅。若說入城便無是難。

問。若其大子不入城者。何故大子上車不入城。中・小三子

入城不上車。答。厭苦求息中・小入城。大不厭苦故不

称入。息処故說。明大不入城。問。門外設於車車中

許三種。中路設化城何因但說。答。二車對大因門

【五丁右】

外三車設。權城對実果中路化城施。理心相似。所對

別故。施設不同。実心齊也。又種智彼無。勸学大。門外設

三車。有余涅槃大。不求。中路二城設。設入無住不名為飯。

非化城故。問。三車俱索。彰希学於智門。二滅不希

心不求於苦息。答。得果自然証滅入城不說希須。妙智

必假更修出宅。故車須索。又居小得城故不須索。種智未

得所以索車。若作此解二乘入化城未得車須索。菩薩不入城

亦須索宝所。此義可然。大乘之往宝所理亦須索。对化城

而不索。所以不論。以每專求即是索也。經文但說父勸令

去為諸衆生不請友故。古相伝云。城為実化息苦所以不索。

車是虚指所以索之。若作是解車離城爾別有。索與不索

義殊車体。古解即城化城類車須索。又有解云。

【五丁左】

車発初機故虚指。城防中退故実化。此又不然。何者初機索車之時已出宅故。又体不別虚・実何殊。心説車・

城体此何法。又有解云。城亦心索。化不途所以不説。

謂下経云。「爾時導師知此衆人已得止息。不復疲倦堪能

前進。」即此索城。此乃索宝所非索城也。雖引此文義終難

解。心細尋之。心云下文知其疲倦為化城。即是索也。

或解車喻無余涅槃。住果未得故索。城喻有余涅槃。住

果已得故不索。若爾菩薩今既索車。亦已得有餘未

得無余。求無余故称索。二乘無余任運定得。須何修索。

故但如前義。所説涅槃二乘無差別。故羊・鹿心無。云々。

ここで引用されている文は、『法華玄贊』第五に、『妙法蓮華経』の「火宅を出た諸子を見た長者が、三子とも安穩に、四衢道、すなわち四諦の理をさとの場である露地に坐したので、障碍がなく、その心は泰然として歡喜踊躍した」の文を解釈して、「火宅を出て露地に坐した三乗がともに四諦の理を觀するので、煩惱障を離れ、分段生を出ることになる。二乗の人は阿羅漢を得て、諸煩惱を断じて有依涅槃に住し、大乘の人は、既に初地に入っているれば、無住涅槃を得て、諸煩惱を伏し分段生死を離れているので、三乗の人が露地に坐することに矛盾はないのだ」とする箇所のすべてである。

ちなみに、四衢道を四諦の理であるとする解釈は、『大般若』中の説であることも示されている。

また、『妙法蓮華経』の「長者が、三乗の諸子が願う時に羊車・鹿車・牛車を与えると述べた」という文について、二乗の人が願う有余依涅槃を、化城に入ることに喩えるなどしており、初地以上大乘の人は既

に無余依涅槃に入っているので、化城に入らないなどとするのである。

そしていよいよ蔵俊の自説が二字下げで述べられている。
以下の通りである。

『法華玄賛文集八十』

【五丁左】(十一行)

尋云。義決二積中後積意者菩薩大子不索牛車者

【六丁右】

如何經文長引云。羊車・鹿車・牛車願時賜歟。偈頌云。

「皆詣父所。而白父言。願賜我等三種宝車。」明知。三乘

諸子

須索車也。依之玄賛中菩薩亦索車。如何背理。并玄賛

作此積耶。若言如初積。菩薩求牛者。菩薩已入初地得

種智牛車

何索車。亦索車者牛車於可立大白牛車。若爾四車家

可順。及理為自索三車耶。

今案。義決既作二積。然初積者。「旧徳説故」者可指光宅等

古師意歟。但依古徳叙義歟。二積之末云。「或有説云。

初機虚指故事須索。或云宅内聞三門外見。不知誰

誰一是故須索等皆非実説云々。此文応指初積古徳

論非実説歟。故二積中二乗索車菩薩不索可為実義也。

【六丁左】

然次問答言取捨任意者。諍菩薩出宅露地而坐。或不

坐。二積取捨任意歟。然經文可有別意。宅内許

三車於諸子一時三乘諸子通定・不定性。於門外求

願時賜與時諸子実唯不定性。此不定性身中具

有三乘種姓故。指此一人一名声聞乘一名辟支仏一名菩薩乘。

一人身中三乘諸子。則宅内所許三子中不定性

一片也。此三子等同乘牛車得未當有。非本所

定。以実而言。声聞乘索牛車也。菩薩非索車。声聞

索車則三乘索車義故。願時賜與之言。亦通三子

也。不爾。辟支仏証果之人前在此云故出宅已索一乘

種智車故。此經大意皆在此云々

蔵俊自説の大意を述べると、以下のようになる。

『法華玄賛義決』の二積中の後積、すなわち、菩薩が牛車を索めないとの積について尋ねている。後積には、『妙法蓮華經』を長く引用して、「長者が、三乗の諸子が願う時に羊車・鹿車・牛車を与えたと述べた」という文が示され、偈頌にも「三子が皆、父の所へ詣でて、願わくは、我等に三種の宝の車を与えてほしい」と述べたという文がある。で、三乗の諸子はすべて車を索めているように思えるが、『法華玄賛』では、菩薩も車を索めることは、理に背くとする。どうしてこのような積をするのかという。また、『法華玄賛義決』の二積中の初積、すなわち、三乗の人が共通して車を索めるのだという積によれば、菩薩も牛車を索めることになるが、菩薩は既に初地に入れば、種智である牛車を得ていることになるので、どうしてそれを索めるのか。また、その牛車とは、大白牛車のことなのか。もし、四車家に順じて、理に及んで自ら索めるために三車というのかと問うのである。

これについて、蔵俊は「今案」として、『法華玄賛義決』の二積の中、初積の「旧徳説故」とは、光宅、すなわち法雲などの四車家のことを指しており、彼らの一義を述べた者であるとす。また、二積の

末に、「或いは有る説に云う。初機はむなく悟りを指すので、車をごとく索めるのである。或いは火宅の中で三車を聞き、門の外で一車（大白牛車）を見る。誰も一車を知らないで、皆が車を索めることは実説ではない」という。この文は、初積を指しており、四車家の古徳が実説ではないのである。それ故、二積中の、二乗は車を索め、菩薩は索めないという説が実義なのであるとする。

また、次の問答の「取捨任意」とは、菩薩が火宅を出て露地に坐すのか、或いは坐さないのか、取捨任意であると述べているのであろうかと問うている。これについて、經文には別意があるとし、火宅内の諸子が三車を索める場合、三乗の諸子には定性と不定性の違いがあるとす。門の外で大白牛車を求めるのは、実は不定性の者であり、その身中には三乗の種姓がそなわっているので、この一人を声聞乗と名づけたり、辟支仏乗と名づけたり、菩薩乗と名づけたりする。これは一人の身中に三乗の諸子がいることと同じなのであり、火宅の中に三子がいるとはいっても、不定性の一人がいるだけのことなのである。この三子が同じく牛車に乗っても、仏果を得ることは保証されないものである。実義によつて言えば、声聞乗が車を索めるのであり、菩薩は牛車を索めないものである。声聞乗が車を索めることは、三乗が車を索めることの一例だからである。また願う時に車を与えることが三子に通じるか否かといえはさうではない。辟支仏のさとりを得た人が、前にこの会を経験したので、火宅を出て既に一乗種智の車を索めることができていることになつてしまふからである。この『妙法蓮華經』の大意は、このように解釈すべきであるというのである。

すなわち、蔵俊は、『妙法蓮華經』の一乗は、声聞乗、辟支仏乗が直ちに大白牛車に乗じて仏果を得ることができるといふことを説いてはおらず、法相宗の主張する五性各別説の中の三乗の性質のいづれかを持つ

か不明な不定種性の成仏の可能性を示したものにすぎないと述べているのである。

ところで、『法華玄贊義決』の二積の中、初積の「旧徳説故」とは、光宅、すなわち法雲などの四車家のことを指しているという蔵俊の説は、貞慶（一一五五〜一二一三）にも受け継がれている。『法華開示抄』には、

義決二積意趣。全不_レ得故。求車義。通菩薩否之二積也。初積。古師四車義歟。或嘉祥三車中異義歟。^⑧と述べられているのである。

三、「索車諍文」について

『法華玄贊文集八十』の後半部は、現存しない徳一（？〜八二一〜八四二〜？）の『中辺義鏡殘』第六「破索牛車義文」の引文（六丁左十二行〜十二丁左四行）と、「破法藏師索車義文」（十二丁四行〜十四丁右十行）と、『中辺義鏡殘』七「索車義殘決」（十四丁右十一行〜二十四丁右一行）で構成されている。尚、先述した通り、二十三丁十二行は、明らかに文章の途中で記載が途切れている。二十四丁右には、一行のみ記されているが、初の四字は脱字となっており、最後に「相違」とのみ記されているのである。

まず、『中辺義鏡殘』第六「破索牛車義文」は、「天台智者諸解云」と天台大師智顛（五三八〜五九七）の『法華文句』が諸処に引用されており、それらの諸文について徳一の説が述べられたものである。『中辺義鏡殘』は現存していないが、『法華文句』の諸説についての徳一の説には、最澄（七六七〜八二二）の『守護国界章』や『決権実論』^⑨

に引用される『中辺義鏡』と同文が含まれている。すなわち、『中辺義鏡残』は、徳一が自著『中辺義鏡』で述べた解釈をより詳細に述べた書なのである。

その内容は、智顛が二乗が車を索めるが、菩薩は車を索めないという法相宗の主張を批判したり、三乗中の大乘を権と解釈することについて、三乗の外に別乗はないのだと反論を試みるなどしたものである。

次に「破法蔵師索車義文」は、賢首大師法蔵（六四四〜七一二）の『華嚴一乘義分齊章』について、臨門牛車を三乗中の大乘とし、露地白牛を一乗とする解釈をすることを批判して、大乘即一乗、一乗即大乘であることなどを述べている。

最後に『中辺義鏡残』七「索車義殘決」は、九の問答から構成されている。現在管見することのできる『法華玄贊文集』には問答形式は見られないことから、異質である。また、初めの問答に、羊・鹿車を索めて、牛車を索めないことに関して七失があるとして、「一得已更索失。二違諸文失。三違許與失。四違遮失。五違領解失。六違喩文失。七違合文失。」が述べられるが、これは『中辺義鏡殘』第六「破索牛車義文」の九丁右二行から十丁右六行に同内容のものが引用されており、十七丁左一行から十八丁右一行の二問答は、『中辺義鏡殘』第六「破索牛車義文」の十丁右七行から十丁左七行と同文であった。これらのことから、『中辺義鏡殘』七「索車義殘決」には、『中辺義鏡殘』の問答料簡が引用されていたと推測できるのである。

「索車諍文」には、蔵俊の自説を示す「今案」の表記がない。また、他の『法華玄贊文集』の本文中には、「破索牛車義文」「破法蔵師索車義文」「索車義殘決」などのタイトルを示すような表記がないことなどを考察するなら、『法華玄贊文集八十』の後半部「索車諍文」は、徳一

の『中辺義鏡殘』である可能性が高いと考えざるをえない。

結

『法華玄贊文集八十』は、慈恩大師基の『法華玄贊』に関する諸文集めた書であり、『妙法蓮華經』の「三車火宅の喩」について、特に菩薩が門外に牛車を索めるか否か解釈するにあたり、法相宗の立場を追求するものであった。蔵俊は自説の中で、慧沼が示した三乗がともに車を索めるという説について、護命が慈恩大師基の説であるとしたことを否定し、法雲など四車家の説だとしている。これは、孫弟子の貞慶にも受け継がれており、この書が後世にも影響を与えていることが知られるのである。

また、二乗は車を索め、菩薩は索めないという説が実義であるとの記述は、既に初地に入った菩薩ならば牛車を索める必要がないとの主張が背景にあることが分かる。三乗がともに車を索め、皆に大白牛車を与えられるという四車家の説は『妙法蓮華經』を十分に理解していないとの批判である。これは、本書が、性を詳細に分析し、真摯に菩薩道を歩むことを目指す法相宗の学匠の本分が充分に發揮されたものであることを示している。

註記

- ① 日置孝彦稿「法華玄贊文集について」（『金澤文庫研究』二六五・二六六号・一九八一年三月）に詳しい。
- ② 『法華玄贊文集八十九 一乗義 無余五』（金澤文庫蔵）二十八丁左
- ③ 『法華玄贊文集九十 一乗義 無余六』（金澤文庫蔵）二十三丁左
- ④ 拙稿「蔵俊著『法華玄贊文集』巻八十六について」（『岐阜聖徳学園

大学仏教文化研究所紀要』第九号・二〇〇九年三月）、及び、新倉和文稿「蔵俊による天台一乗批判の展開―『法華玄贊文集』八十九の翻刻読解研究を中心にして―」（『南都佛教』第九十五号・二〇一〇年十二月）を参照されたい。

- ⑤ 大正九・十二中～十三下
- ⑥ 大正九・一二下
- ⑦ 大正三四・八六八中～下
- ⑧ 『妙法蓮華経憂波提舍』（大正二六・七中）
- ⑨ 『法華玄贊』（大正三四・七一上）
- ⑩ 『妙法蓮華経憂波提舍』（大正二六・八中）
- ⑪ 『妙法蓮華経』（大正九・十三下）
- ⑫ 同右（大正九・十二下）
- ⑬ 『法華玄贊』（大正三四・七五〇上）
- ⑭ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八中）
- ⑮ 吉蔵『法華義疏』（大正三四・五二七上）
- ⑯ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）
- ⑰ 同右（大正三四・八六八下）
- ⑱ 『妙法蓮華経憂波提舍』（大正二六・七中）
- ⑲ 『妙法蓮華経』（大正九・十四下）
- ⑳ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）
- ㉑ 『妙法蓮華経憂波提舍』（大正二六・七上）には、「為令証」とあるが、『法華玄贊義決』では、『妙法蓮華経憂波提舍』を引用して「為令入」としている。
- ㉒ 『妙法蓮華経』（大正九・十二下）
- ㉓ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）
- ㉔ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）

㉕ 李通玄『新華嚴経論』（大正三六・七三五上）に法雲の説として引文がある。

- ②⑥ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）
- ②⑦ 同右（大正三四・八六八下）
- ②⑧ 『妙法蓮華経』（大正九・十二下）
- ②⑨ 『法華玄贊』（大正三四・七四九下～七五〇上）
- ③⑩ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八下）
- ③⑪ 同右（大正三四・八六八下）
- ③⑫ 『法華玄贊』（大正三四・七四九下～七五〇下）
- ③⑬ 『大般若経』（大正七・七三三上～中・取意）
- ③⑭ 『妙法蓮華経』（大正九・十二下）
- ③⑮ 同右（大正九・二七上）
- ③⑯ 『妙法蓮華経』（大正九・十四下）
- ③⑰ 『法華玄贊義決』（大正三四・八六八中）
- ③⑱ 同右（大正三四・八六八下）
- ③⑲ 『法華開示抄』（大正五六・三一六下）
- ④⑰ 『法華文句』（大正三四所収）
- ④⑱ 『守護国界章』（大正七四所収）
- ④⑲ 『決権実論』（『伝教大師全集』二所収）
- ④⑲ 『華嚴一乗義分齊章』（大正四五所収）
- ④⑲ 『中辺義鏡残』第六「破索牛車義文」では、「五違領解失」が「五違歡喜失」と表記されているが同内容である。